

国内経済情勢

概 観

輸出は海外景気の停滞や輸出先における現地在庫調整の持続から引続き低迷している。中小企業の設備投資は依然動意に乏しく、住宅投資も月々の振れはあるもののならしてみると低水準に推移している。この間、個人消費関連では、秋冬物衣料品売上げの出足が鈍い一方、乗用車や一部家電製品はまずまずの売行きを示している。一方、大企業の設備投資は、一部に能力増強工事を繰延べる動きはあるものの、省力・合理化、新製品開発投資を中心に引続き底固く推移している。また公共事業請負額も政府の契約促進態度を映じて増加した。こうした状況下、生産、出荷は一進一退のうちに推移している。

9月の商品市況は、メーカー、商社の供給抑制持続や為替円安に伴う安値輸入玉の流入減等から上昇する品目もみられたが、秋需期入りの割には荷動きに乏しく総じてみると弱保合いで推移した。この間、9月の卸売物価は鋼材や石油製品の値上りのほか為替円安の影響もあって続騰した。また、消費者物価(東京、速報)も天候不順から生鮮食品が値上りしたほか、秋冬物衣料の高値出回りもあり上昇をみた。

金融面をみると、8月のマネーサプライ前年比伸び率は企業の資金需要の着き基調が続くなかでは前月並に推移した。また、8月の全国銀行

貸出約定平均金利は小幅ながら引続き低下した。

この間、9月の公社債市況は為替円安の進行等から弱含みとなった。

8月の国際収支をみると、経常収支(貿易収支季節調整後)は引続き黒字となったが長期資本が本邦、外国資本とも流出超となったため、総合収支は前月に続き赤字を記録した。9月の為替市場をみると、米国金利の下げ渋りや中東情勢の悪化等を材料に米ドル全面高が続くなかで円相場は軟化をたどり、月中では大幅に下落した。

生産、出荷は一進一退

8月の鉱工業生産(季節調整済み、前月比*、速報)は-0.8%と前2ヵ月増加のあと減少した。一方、出荷は0.1%の微増となった(前月-0.3%)。

* 以下増減率は特に断わらない限り、前月比または前期比(物価を除き季節調整済み)。

当月の財別生産、出荷の特徴をみると、一般資本財(電子計算機、事務用機械等)、資本財輸送機械(船舶)が増加をみた反面、耐久消費財(ラジオ・テレビ音響装置、二輪自動車等)は輸出低調から、また建設財(鉄骨、セメント等)も民間建築の停滞から生産、出荷とも減少した。一方、生産財(一般機械部品等)の生産は微減、出荷は横ばいとなった。この間、生産者製品在庫(速報)は、素材業種で徐々ながら調整進捗をみているが、エアコン等夏物商品の売行き不振に伴う在庫積上りもあって+0.3%と引続き増加した(前月+0.3%)。

国内最終需要の動向をみると、まず設備投資関係では、8月の機械受注額(船舶、電力を除く民

需)は鉄鋼、化学等製造業からの受注増加を主因に+13.9%と3ヵ月振りの増加となった。一方、8月の建設工事受注額(民間分、速報)は前2ヵ月減少のあと+9.5%とかなりの増加を示した。

8月の住宅着工戸数(前年比、速報)は、公庫融資分の着工や貸家住宅の建替え等の増加から+5.0%と2ヵ月連続前年水準を上回ったが、ならしてみると依然低調に推移している(4~8月前年比-5.5%)。

また、9月の公共事業請負額は政府の契約促進態度を映じて+6.4%と前年水準を上回った。

8月の全国百貨店売上高(通産省調べ、前年比、速報)は、天候不順による秋冬物衣料の出足不調等から+3.3%と伸び悩んだ。この間、9月の耐久消費財の売行きをみると、家電製品はステレオ等音響機器は依然低調であるが、VTR、電子レンジが高い伸びを続けたほか、カラーTV、掃除機等も増加するなど全体として幾分持直し気味に推移した。一方、9月の乗用車新車登録台数(除く軽、前年比、速報)は前月減少(-0.5%)のあと+4.1%とまずまずの伸びを示した。

8月の雇用動向をみると、有効求人倍率は0.58倍と4ヵ月連続の横ばいとなった。また、常用雇用は0.1%の微増となり、完全失業率は2.31%と前月に引続き低下した。

卸売物価は続騰

9月の商品市況をみると、メーカー、商社の供給抑制持続(形鋼、製材等)や為替円安に伴う安値輸入玉の流入減(化学製品、アルミ)等から上昇する品目もみられたものの、秋需期入りの割には荷動きに乏しく、繊維、紙パ、セメントが弱含みに推移したほか合板、銅も反落するなど、総じてみると弱保合いで推移した。

9月の卸売物価は、鋼材や石油製品が値上りしたほか、輸出入品も為替円安から上昇したため、全体では+0.4%と続騰した(前月+0.3%)。

9月の消費者物価(東京、速報)は、野菜等生鮮食品が天候不順から前月に続き大幅上昇をみたほか、秋冬物衣料の高値出回りもあって、全体では+2.0%(前月+0.8%)となり、前年比も+4.3%に上昇した(同+4.0%)。

公社債市況は弱含み

9月の金融市場をみると、銀行券は1,375億円の還収超(前年同1,974億円)となり、月中平均残高(前年比)は+7.5%とやや伸びを高めた(前月+7.0%)。一方、財政資金は、国債発行額が前年比縮小したものの一般財政の払超幅が大きく縮小したほか、外為会計の揚超額も前年に比べ拡大したため、全体としての揚超幅は10,701億円と、前年同月(同3,994億円)を大きく上回った。このため月中の資金不足は9,655億円(前年同2,541億円)となり、日本銀行は貸出の実行等によりこれを調節した。

この間、コールレート(無条件物)は資金不足を映じて29日には7.1875%まで上昇したが、地方交付金の支払等から月末には6.9375%に低下した(月中-0.125%)。また、手形売買レート(2ヵ月物中心)は季節的な資金余剰期を控えていることもあって月中0.1875%低下した(月末7.125%)。

8月のマネーサプライ(M₂+CD平残、前年比)は、企業の資金需要の落着き基調が続くなかで、+9.0%とほぼ前月(+9.3%)並の水準で推移した。一方、8月の全国銀行貸出約定平均金利は、6~7月の決算、賞与資金貸出等低利の季節資金の回収もあって-0.004%と前月(-0.016%)に比し低下幅を縮小した。

9月の公社債市況は、上旬中信託等機関投資家の購入からやや上昇したが、その後為替円安の進行や資金ポジションの悪化を背景とした都地銀筋の小口売りから弱含みに転じ、結局通月では若干の下落となった。一方、株式市況は円相場の軟化に伴う外人買いの後退等から下落した(東証指数月末524.00、月中-6.48)。

長期資本の大幅流出続く

8月の国際収支をみると、経常収支(貿易収支季節調整後)は6.3億ドルの黒字と前月(同7.7億ドル)に比べ黒字幅をやや縮小した。この間、長期資本収支は本邦資本が引続き高水準の流出超となったうえ、外国資本も2年10ヵ月振りに流出超を示したため、全体では22.9億ドルの大幅赤字(前月同19.6億ドル)となり、この結果、総合収支は4.0億ドルの赤字と3ヵ月連続の赤字を記録した。

8月の輸出(通関、ドルベース)は-3.3%と4ヵ月連続の減少となり、数量ベースでも2.2%の落込みをみた。品目別(数量ベース)には、鉄鋼が

棒鋼を中心に増加し、また船舶も引渡し集中から著増したが、自動車が減少したほか、テレビ、テープレコーダーも輸出先市場における在庫調整の影響から減少を示した。

8月の輸入(通関、ドルベース)は前月増加のあと-0.4%と微減したが、数量ベースでは0.9%の増加を示した。品目別(数量ベース)には、食料(小麦、砂糖等)、羊毛等が減少した一方、原油が入着集中から増加したほか、綿花、木材も当月は増加となった。

なお、9月の輸出入(通関、ドルベース)は各+0.7%、-1.2%となった。

9月の円相場をみると、月初しばらく260円弱で揉み合ったが、その後米国金利の下げ渋りや中東情勢の悪化等を材料に米ドル全面高が進むなかで軟化を続け、結局269円40銭の安値で越月した(月中9円80銭の円安)。

(昭和57年10月15日)